

2005年10月30日 聖霊降臨節第25主日礼拝

『信仰によって生きる』

(マラキ3章14~18節、ヘブル10章32~11章2)

今日は、宗教改革記念日礼拝です。改革者ルターが、教会の扉に95箇条の提題を掲げたのは、1517年10月31日のことです。この時代は、ヨーロッパ中のほとんどの人々にとって、教会に行くのが当たり前でした。しかし、教会の信仰は低迷しておりました。贖宥状(免罪符)販売はそれを象徴しています。ルターは、贖宥状を買うことには意味がなく、人が救われるのは信仰によってのみ救われると主張したのです。ルターからの95条の提題が宗教改革の発端となります。このルターから示された提題は、聖職者たちへの質問として出されたものです。しかし、それは印刷され各地で聖職者たちに留まらず大いに反響を呼びました。人は、信仰により救われるということを提示して始められたのが宗教改革でした。

さて、今日読まれたヘブライ人への手紙にも信仰という主題が出てきます。「光に照らされた後、大きな戦いによく耐えた初めのころのことを思い出してください」。この言葉は、この手紙を読み聞かされた教会員たちに信仰が与えられた日々のことを思い出させます。この手紙を送られた人々にも、わたしたちと同じように始めて教会に来た日があり、初めてイエス・キリストの福音を聞いた日々がありました。人々は、教会に来て聖書の御言葉を聞いて、福音の光に心照らされて、イエスを救い主と信じるようになりました。わたしたちの場合もよくあることですが、イエスを信じるようになったら、仕事も人間関係も全てが上手く良くのではないかと考えます。しかし、実際には、教会の人々の上には大きな戦いが待ちうけていたのです。教会の人々を待ち受けた戦いとは、迫害というものでした。この手紙は、ネロ皇帝がクリスチャンを迫害した時代かその前後に書かれたのではないかと考えられています。ローマ帝国は、紀元前27年に建国されます。紀元後312年には、キリスト教がローマ帝国の公認宗教となります。それまでの間、ローマ帝国ではキリスト教に対する迫害が断続的に起こりました。クリスチャンは、ローマ帝国の中でどのようにみられてきたのでしょうか。クリスチャンは、ローマの伝統的な宗教に参加しない、外国からの迷信を信じている変わった人たちだと思われてきました。現代の、わたしたちの国日本も公には信教の自由を認めています。けれど、ふたを開けて見ればどうでしょう。クリスチャンは、先祖を拝まない変わった人たちである、先祖祭りをしない不謹慎な輩だと思われています。この点で、いまのわたしたちとローマ帝国のクリスチャンは似たような立場にたたされています。キリスト教が、公認される前のローマ帝国でも、普段は、クリスチャンに対して余り大きな迫害はありません。クリスチャンと周囲の人々は普段は、互いに平和に過ごしていました。ところが一度、大きな地震や火災などが起こると、辞退は一変します。この災害は、クリスチャンたちのせいだと、何の根拠もないのに、うわさが流れていくのです。こうした、根も葉もないうわさの為に、教会は時に大変な迫害にあって来たのです。ネロ国定の時代に起こった迫害も、そうした根拠のないうわさに基づいた

迫害でした。教会の人々は、迫害という戦いが起こってもよく耐えて来たのです。「あざけられ、苦しめられ見せ物にされたこともあり、このような目に遭った人たちの仲間になったこともありました。実際に捕らえられた人たちと苦しみを共にし」てきました。ローマ帝国の闘技場等でクリスチャンが大勢の人々の前で見せ物にされ殺されていったことがあります。クリスチャンになったら、仕事も上手く行って財産を増えるというならそれに超したことはありません。しかし、実際にはそうはいきません。クリスチャンは、人々の前で嘲笑されたり、見せものにされ、精神的、肉体的にも迫害を受け、財産を没収されたり、追放という憂き目に遭い社会的にもたくさんの不利益を受けていたのです。パウロがコリントで伝道したときに出会ったアキュラとプリスカ夫妻もそうした人たちです。この夫妻は、皇帝の命令でローマ市内からの退去を命じられたのです(使徒 18 章 1~2)。彼らは、追放され、財産なども全て持ってくる暇などなかったことでしょう。テント職人として生計を立てており、そのような時にパウロに出会い伝道の協力をする事になったのです。あの時代、執政者の命令で、済んでいる土地から立ち退きを強制されるクリスチャンたちも少なくありません。強制退去している間に、泥棒などに財産を奪われても家を荒らされても何も保証もされていなかったのです。この手紙を受け取った人々は皆、程度の違いはあっても迫害を経験していたのです。人々から、軽蔑されても、財産を奪われることがあった。それでもクリスチャンたちは、落胆したりしませんでした。むしろ、それを喜んで受け入れてきました。教会の人々は、知っていたからです。自分たちは、この世で財産をとられたとしても、更に勝った朽ちない財産を持っていると。神様によって備えられた将来受けるべき祝福があることを知っていたのです。神からの祝福を確信して来たのです。これは、わたしたちにも与えられている確信です。35 節「この確信には、大いなる報いがあります」。神は、御自分に従うものに大いなる報いを約束なさる方です。アブラハムにも神はあなたの受ける報いは大きいと約束しました。神様がわたしたちに与える報いは、この世の与える報いとは違います。それは、永遠に朽ちることのない命という途方もない報いです。この報いは、わたしたちが、何か立派なことをしたから与えられるものではありません。わたしたちが、先に神を信じたから与えられたのでもありません。わたしたちにはそれを獲得する力はありません。わたしたちは、神に背き続け、隣人を互いに傷つけ奪いとることしか知らなかった罪人です。罪人のわたしたちには、それを受ける資格などなかったのです。「罪が支払う報酬は、死です」とパウロも言っています。罪人のわたしたちが、受けるべきものは、永遠の滅びしかあり得なかったのです。ただキリストが、わたしたちの為に執りなしてくださったから私たちは神から恵みを受けることができる。罪のない方が、わたしたちの為にいけにえとして御自分を捧げてくださった。このキリスト故に、神は罪人のをわたしたちに大きな報いを約束なさったのです。もしキリストが、わたしたちの為に犠牲となってくださなければこのような報いはあり得ないものです。わたしたちが、神様からの報いを受ける為にキリストは必要なことを全てしてくださいました。それはわたしたちが何もしなくてよいということではありません。36「神の御心を行って約

束されたものを受けの為に、忍耐が必要なのです。わたしたちが、試練の時を耐え忍ぶことができるのは、神からの祝福があるからです。私たちは、一人で試練を耐えているのではなく、キリストがともにいて私たちを負ってくださるからです。私たちは、主イエスの足跡を辿るため試練を堪え忍ぶのです。キリストを通して約束されている神の報いを信じて生きる。それが信仰です。ですから、信仰とは単位己の信念を通すことではありません。神様からの、約束が必ずその通りになると信じて行くことです。11章1節「信仰とは望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認する事です」。わたしたちの希望の根拠は、唯神様にあります。なぜなら、わたしたちに本当の意味で報いを与えることができるのは神さまだけです。神様からの祝福は、今はこの目で見ることができません。けれどそれは必ずやってくる。今目に見えているものはやがて過ぎ去ってしまいます。しかし、神からの祝福は、古びてしまうこの世の財産とは比べものにはなりません。この確信を捨ててしまったら、わたしたちは本当の意味で生きる目的を見失ってなってしまうでしょう。信仰とは、神が約束されたものを現実のものとして待ち望むことです。今目に見えるものよりも、将来に神様が私たちに与える報いは確かです。

それは、キリストが再び来られる日を待ち望むことです。キリストが再び来られるのは、わたしたちの為です。キリストは、永遠の命を携えて私たちのところに来てくださいます。その日が必ず来ることを信じましょう。37節「もう少しすると、来るべき方がおいでになる。遅れられることはない。」もし、わたしたちの信仰が、ひるんだり躊躇してしまうとしたら。それは、神様からの約束を信じられないからです。キリストを待ち望まなくなった人は、信仰者として目標を見失います。しかし、わたしたちはひるむことなくイエスキリストを信じる信仰によって命を得るものとなりましょう。私たちの主イエス・キリストは、今も生きておられます。「この方は、常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことができになります」(ヘブライ7章25)。キリストによる完全な救いを信じてこれからの信仰の旅路を歩んで行きましょう。 [説教者：堀地敦子牧師]